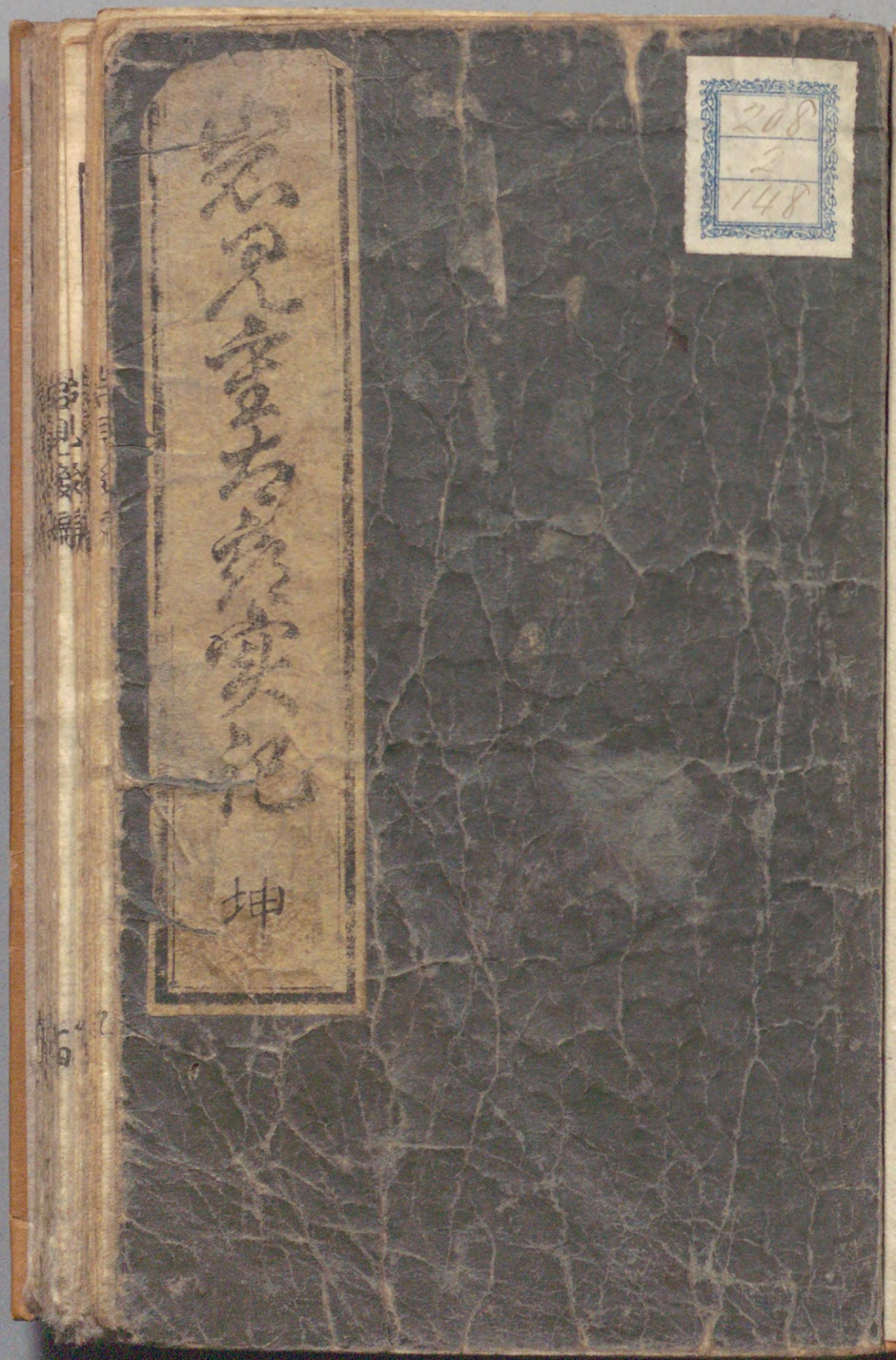
岩見重太郎實記

二止

208
2
148

国立国会図書館　　岩見重太郎実記 2編 208-148

ガラス使用



208
2
148

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148

ガラス使用

軍書講談

續切一代記

東都書屋　當世堂寿梓

岩見重太郎一代記後編序

前に岩見英雄録と題号ものせし稗史ありて年歳編綴巻を
重ね當将既に四輯に及べり。その趣向や種季が一世の
芳擧を著述ぬる。作者は浪花名家にこそ遮莫團圓遥
に遠く近く結局するに至らず。看官書買を促こと最めなび
もしと聞ものから。竹をたゞめて弓とな枝を折て矢に換る。例も
わなきは本輯の發兌を待詫ゐる間の徒然草に備えんとて
書屋が需に二帙の稿は所謂錫をもて銀と欺くたらひぞ

于時安政己未仲秋
戀岱於月下稿成

一龍齋貞山記

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148

ガラス使用

唐駱賓王曰鐵衣着盡着僧衣

浪士野村新十郎實名岩見重太郎種季

洛西行者鐵牛道人

實名園萬左門氷頼

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148

ガラス使用

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148

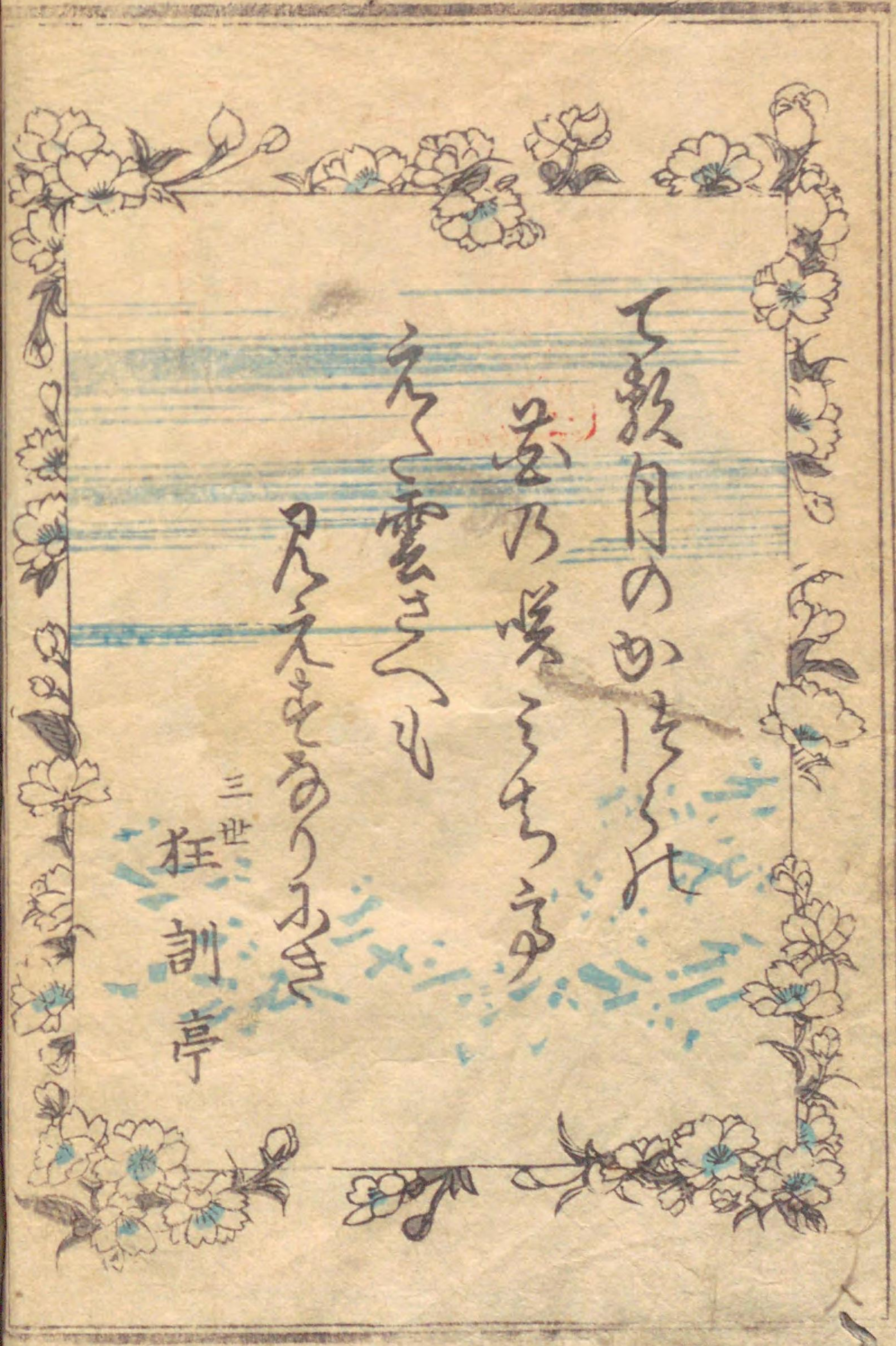
ガラス使用

岩見重太郎一代實記後編

東都　一龍齋貞山編次

第拾貳回

再説岩見[illegible]院曲を走りし三浦氏の家内の[illegible]
[illegible]で月日も久しく経るに[illegible]車[illegible]居るがその
間[illegible]より[illegible]書見年一つ周章[illegible]走[illegible]り館の夫婦に
[illegible]けぬくと[illegible]くを制して[illegible]妻[illegible]
[illegible]術の[illegible]の[illegible]
術[illegible]抵[illegible]
郎ふをあきれば女ふ帰ろふ[illegible]こそと思ひ中[illegible]
殊更自除の女と只独りにて[illegible]勧めぬきへ利[illegible]
換[illegible]ともに病気を逐て後帰国の[illegible]の代[illegible]を与へ



あるハ食ふよりもあらじ只うち棄て並べしと家内の者ハ口とめ
なし意に人を見せて別の遺出一通を持せて板橋に遣らせつ
稚松左平に被せけるに左平夫婦ハうち驚き後に連立三浦
屋の絆に来りて亭ゝに縄を掛ける所その身代ハ僕が償ひ申
さん暫しハ待てゐハまじく彼に人ハ押としいなく夫婦いかで
及ばんんをひハ無用にこそと云ふぐさめて取しけまゐり稚松
左平ハ国の永和に託せらるを嗣子に却て窮国の厄を救ハ是今更に
その行方をまゝ知らでや有へ然と此後田定什器を沽却八十
ひらの黄金の外に路の費の用意を個へ夫婦三浦屋が絆に来
て八十金を見出し夫婦回国修行して岩見兄妹が行方を尋
ねん内に譲ることのよしを語ハ夫婦ハかまく感じあくて

彼金を請取らねバ左平も今ハせんかたなく妻を人質の内に
とて当家に預けて出立ける却説に肥後なる小渡戈荒宮
秀が内室の後女ハ稚季が宮部の方へ行し絆にて一嚢の金
を承策に納め出来りたる婢を呼て竊に心を行させつゝ城市
へ買物の有にもてなし国扇屋絆に持せゆり彼室太郎稚季が
此頃の費をむくいんなりしがその日由牌に彼婢帰り来りて
岩見ぬしハ彼国扇屋にハ出産さねバ続に帰り待りと告まゐ
後女ハ帰りて稚季が遠慮にて旅舎を別にせしとハ知らねハ
いと出意なくて思ひけり此日小渡宮秀ハ例のごとく三うらやへ
通りけまども玉緒にハ鬻より他の客ありて今難きよしなまゐ
給方なくて其旅を明し翌日家に帰りけるに岩見が家にあら

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148
ガラス使用

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148

ガラス使用

ざまは妻を唯で尋ねるに昨日年頃より出なひぬと言ふに渡
守たる帝が昨日の詞の意にかゝるは別舎にぶり見るに清らし
うに掃除してその所柴も見へざまは公務の筈の中なる
選書を披閲て急ぎ悔ゝ我楽をもてあそびしに門人等に
藪抜させそのうちに玉緒を靡行なば以前の試撃の恥辱を
雪ぐ恨を報ん謀計なりしをあ更にして楽奴我機密を察
せしなるゝん先迎せしこそ安からねと怒まるんを先迎しつゝくと
思ひけるは此遺出の如くなるは親を思ひ国を慕ふて急にいそぎけば
諸家を経過り我と試撃のる事を云解を深いあらじ僧再び
来りなば其時こそ手順あらんと怒を静て妻を唯生きてこそ
云懲せしのこそ深くも恐めぬ罪にけるなる秀此日も申ゝ

より又も三浦が許に玉緒は三浦屋にもに渡を真実の男気と
思ふにより玉緒がある明白に云くと告げまば我人中大に
愕き頗る事を失ひけるとも気なにも恐さに我その中を問
けるに固扇屋より初めて来りし客人の再び来りその夜伴ひ
奪しとて玉緒が素屋の親き等は秘して誰も告ざりけり者ども
才房その人は老見稚楽なるゝんとは思ひよりさるてなまば何
故なまば玉緒の別深も深きに伴ひて奪りしならむと同然
院曲中へも面目なく消るが如く家に帰り映くとして寝ませ
明まば十日の朝まで此に兼て師弟の縁ある陰矣二本松の渡
人なる安是授内訪ひ来り霜に小渡にやけるは昨日亭午は
左田原の廓邦なる東店にて年齢は唯なる旅偉幾十三ならん

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148
ガラス使用

屋の玉緒連て体くひしかいと面審出るを火急に鼓道中さん
と何氣なく生殺をしたるをいそだて走急りぬと吹も聚を寄るに
乞仲摩るが如く嫗く扨ハ玉緒を奪ひ去しハ岩見にてありけ
よと樽内に種季がるすをゆるく拘語り俄に同氣に求め後ん
無二の弟子なる者へ只已妹を呼ばして妻にハ安達の吹拳
にて二本松の源を留山義延にハ謁を命らせられば明日早大に
発程乃日清無二の人くに皆別きの盃をゆるを笑を開く乃夜に
彼せよかしと候ま行に猶女ハ收びその用意をそのしにける形にし
行に小渡り門せが候大助白川美治光船与助ハ雲平ハ森本
東洲なんどいへる血氣暴勇の壮士たちに渡り家に入其ハ才
務する秀氣に收ひいそだ五人を密室に落とその隙ハ安達

樽内に内弟子なる食客を見軍去をもその席に列ねまけ
宋清にあらびけり

第拾参回

木朽て蠹をこまに生じ人殺て誰こまに入るに渡り秀ハ
同臭一味の徒士を招き竊に岩見種季が玉緒を誘て千余
せしを語りて彼等の語を追欠岩見を討て玉緒を奪返さんと
則ちまつけ日来の盟好に力を合せ功を遂させなかりしと彼あれば
一度の徒子だらハ一議もなく黨与しければ今秀ハ大に悦び然
らば明曉発足せし各人案を送ると称し同居なりしを行ふ
夏と極りしこまに遠くても仙基にそれかならず楽等に進行人
連を取て労を討計ハ云くと徒語示せば大家寄りて奇なりと

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148
ガラス使用

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148

ガラス使用

程て階ゟ行ント互ニ酒ヲ酌カハシ時ヲ移シて別ヲ告ケルソノ中ニ
ホト見重太郎ハ獨ホト師ノ妻勝女ヲ招キソノ事云ホトアザムキ
ホト徒ホト使宣ヲ待ど敢て答ル気色音信モナシ
脱ヒくゝもゝりぐゝこゝろをけるゆへ去る比勝女ガ狂乱ノ体ハイカヾ
今ホト出入ヲ遮ホトちゝと見ゝうしろ姿ホト仏中大ホト怒ル怪ーゝ
勝ホト年ゟ命と密ホト膝ヲ通ヒぬるホトゝ奴敷ノ気ヲ動シけるを
ども能もの気ホトめゝゝゝて勇勢無双の狂乱ガ怒り解て大悔返
と獨ホトホトのび居るうちゟ七日又も別ゐホトヲ去ル帝ガ宇都
の矢のゐと勝子ホト告居ゝるヲ見ーとのひ狂乱ガ今度狂乱玉
箱ヲ携へて七命せーホヲ自然男ひ仲ヲるゐ地ーて今ハ怒り
果び難く渋々我師ノ命ハ我ホトホトも無ノ仇敷ーて暇ヲも
幸ゐりまゝ勝女ゝも彩まゝホつまゐの気うゝ壮後ゝもよゝ
ホト解ゐことホトめゝじ人我ホつゝけきび我も又雲桜ゐり百居倍ゝ時ヲ
けゞぜりいゝ男ひ初ーせんと容赦て後ゐ秀ホト勝女ゝ出ノ人ゐ通し
ぬゐう後ーゐホト後ゝ云しけるべゝ
せ彩ゝゐ勝ヲ押ゐうめ今我ホト師ホトゝ
ゐりまん描て仔細ゐゝホト暁告ゝゐの設ヲゝーゝて日既ホト暮
近ゝゝころ夜巻側方ハ云ホトゝもゐ
の人ヲ伴ひゐホトのゝゝ什器もあり
路金ヲ肥ホトゝ準備ゐ勝女ホト
安達桃内有見軍六ゝ左右ホト伴ひ
て陳ゐゝ出ルけるゝ程ホトゐ勝女ゝの気ノ緩ホ

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148
ガラス使用

人氣なくなりていと氣をかはしく思ふにつけ此日はさしも晴やかなる天さへ俄にうち曇りいと志めなりに黄梅雨降ゆゑ秋に入ければ寂寞として相慶き折しも初更とおぼしき頃に門を遑遽く敲きて云ふ途中にて急に病発らせなひ急ぎ尾へ見へゆゑ乱てかへりて敷まろると呼ばりけるに一人の老僕驚て母屋に入り傍女に告ていそがはしく門を開くに面を覆せし曲者等に名誉しく入より早く彼僕を矢座に縛り門の傍に撃だ無き直に母屋に潜り入有無を云せば傍女と下婢に猿ぐつわを喰せ縛りあげ奥に入て令狼夜彼を捜索て奪掠め傍女と下婢を引かつぎ何処ともなく逃去ける憐むべし傍女も縛ハ彼曲者等に擒ゑ雨の曉路をひた濡て引かつぎて行程に縛の口人に一叢

繋る杜の中に分入てある辻堂に二女を下し暗號の喫音なくばうちより廉冥くにぞ口人りは二女を引立て迫て入るにぞ二人りの女ハ恐しなぐら見をつる焼の新に居並びしは中央にハ小浪弓秀左右にハ小役白川岩船真砂森本等各一様の征装苛めしげにひらへけるにぞ傍女はもとより下婢も共に再び驚ぬ後をみんまば安達檜門亦見軍六奴僕大平熱六等被たる所中をぬぎ捨てひとしく面を露しけり曲下に弋蔵弓秀は嗔まる眼に傍女をおらそ汝ハ見へあるべし能も岩見に然通し丈のこなるに岩見めが玉緒を誘いざし亡命せしるのえは必らず汝より発りしなるべし宝くも某に恥辱を与へし人畜生急だの路を此所に留し注めし今宵の役は報の程を思ひ知らせん為にてあるぞと罵りけるに

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148
ガラス使用

口閉て苦しみ物に移こそあれ長なる事数うち死を口に籠たる
猿側の思ひを解て一変さるくさけべいる秀夫に起ろた人や
笑んと踏居て繰続く咽喉をうなちくかけて刺黄き大地に表
と縫付きに消魂夜の悲凄く耳にへらぬく完動の形相
身の毛もよだつ計なり折て弋落たる秀は大平恵六をして
二女の死骸に石を結ぶて、五月雨の降つゞきたる後なるを
多倍増たる河中へざんぶと投入かし沈め今は也も心安しと
兼て初夜に奪ひ置たる波和に生べて十人うち栗川を渡しつ
死が如くに急ぎける

第拾四回

話説に浪たる秀は擂に擂で急ぐ程に不日して陸奥國に

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148

ガラス使用

いづく白川の橋下ふ宿りて尋ゝ捜ども岩見兄嫁ろ陰をだにかゝるようすをだに見ふ二本松の橋下ふさゝやき後ふもおゝ打ば絶白ふうの人どの地にも尋ね巡り同月十五日ふ至り橋那ふ佇ろ女ふ行ひ衣を更めえ事一方ゝ行けるうとまる旅宿ふへて遠ふ先て遣一通の書乃を直ふ南ふ向ひ紙を広ーて認ける小浪改日高の如字ふ後つて参飛脚ろ委ろ称ー備士を修者ふ走ら使くやりて跡ふ残ふ別り旅籠ふ投ー打て休意家の長尾伊左上野介政ろ家の郎ふ当り判形ーてやけろ事へ深軽き別墨の注別の令手波墨ろ委ろ使ふ託ろ玄番ろ秀ふ出殺害君殺下の士岩見を内ゞみを方帰ろ事一者同藩尾乃常刀ろ女ろ須ふ寝通いろ

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148
ガラス使用

下婢が縛め解捨させなどしまはして責問けれども始は黙く云
ざりしかども終に猪女が後して宮部文へ刻りしかども文策の中に
今にてもありしや重く縛りしと逐一に口ばしれば猪女は首を打
揮つ身を閉えつゝ吹と毎に云訳せんにも猿ぐつわ身は四めの
縛り縄為術なければ只管に文をこゆりて涙を流しいと恨し
げに軍六を尻目にかけて抱云へげにあせるは奈見が終云
ならんと心に激えし故なるべし言秀は嘲笑ひ寛早大罪明白
なりいでやいと及をとらせんと強刀ぬらつれと引拔て名もしまる下婢
が細首対落しつゝ拳のさえおびゆる猪女を斬倒して左の右猿
ぐさと刺ばさと迸る血の集ひ聞へ苦しむありさまを快げに打見
やり鶏の如くさいなめばくは質は倒れしをうつ縛ならどめく変さく

家家の猿呂侯朱宗女に結髪の盟約あれば侯朱并に一族の
者ども岩見が不義を憤り其罪を責糺はところに彼を大郎は
弱冠なりしも武藝に長じ膂力亦尻に縛れし其事家中侯朱が
家を襲ひ宗女を初め家内の男女七八人を殺害し密通の娘
正絹を誘ひ出奔いたし尚家は頗く無しは其家へ隠れなく
主人もまだ怒り宗家へ云訳立難しと岩見と女が親を聞き追捕
嚴重にはなり是に後て尚家へも使者来をもつて頻と迫しは
然るに近人相素に仇よりは者者國封疆を離個いたしは
早速に捕らせ通を遣ぬるべしとて業て縛め乗し岩見兄嫁が
骨相素を見出し粉白川田村等の諸家へも彼等友人を紛く
名逃かまじきの為に急使を以て囑き垂れくば宮て彼地も実を

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148
ガラス使用

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148

ガラス使用

居らせ給ひ来を改むることを肯んぜ給ひ若彼等大事を図とするとも
お途塞をはゞ先て逆し大國に隠せんとするとも肯べ
此等の勢を保定願へ云ふことを遂ふ迄に命令を行へ給ひ
べくは案所用も此無ひ之ば暫し堪ゆに遅延ゆれ之ば不出
に右犯罪人捕へ給ひ直に請ふ此て得るも役宜に此事無て
之人形を此義中居は処なりと一云平白のよどこなくさへ
にこそ逆なりけれは政系殿に氣及なく彼思家より来意の勢き
兼りはひぬ即刻寡君へ達して後是より後鼓まで言ゆさん
と肯けるべき事ハ此時代帳を先て後鼓に帰り拵備も
門人を以て思ひに此味の人を竊に陛視居さりける所り後に
保定政系ハ無れる君に物謂し彼思家よりの使者の来意を

形拵々々と云ふ上けるに方系大変輝峯ハ智勇を兼し良将
なれは此刻を熟使て古く親好の思家の嘱えの一義等宗なら
ぜ云なるゝ当時年我の世なれは年忽の計ひも不急なり此事
一意の思へ密に使者を差して性に実否を究じ尤城外に実
柵を設け此来の人を竊に志らべ若此よりの者あらば只何なく
留め問ひ者と見極めるべき思ひ者をせし使の帰る後報に
より如何とも計ふべしと命令に政系うしとして退出しつ私宅に
帰り使を奉ず猿雛へ差し順義の返言し迷に城外の関門に開
相書法を有を行へて令を下し厳重にこそ申せられ翁
弥云朱ゟ秀ハ通行を求めて関吏に納絡を送り将軍を恵招
に云なしつゝ関吏仕不長方ろが子息周る統中壮年血氣の

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148
ガラス使用

勇に逸り絵劍の術を自負し驕慢を忘し紀忍せ者なるを為
秀卑くも是を喜ぶし深くも情を結び盡きその武勇を重く
僕し例の倭兵邪智を以て宏見を彼うるに対せんと瞞し激
薪に火を添る如くになりけるに因る是を恨び係し父を係
城郭なる芭蕉が辻の申明亭に構へるし云る新関に又十余
名の士卒を給へ往来の人を改め糺さるに百々武勇盛治に
百五十騎の組子を招て非常に備へ號あらば来りて力を係せ
べしと約を定めて招陣に緊嚮を天下に知へけり

第拾五回

却説宏見重太郎は妹嗣子の丞綱を伴ひ連て年月の廿五日
といへる日に伴ひ郡の城下近く来り芭蕉が辻に出行しかるに

お途に一筆の陣を張りて後拝後又蔵おんど陣おのに立列ね柵
門の際に殺十人の士卒者にちまるさ成ばこくのゆにしあれば
不良の儒ならましと更に怪むなく道を張て左右に探げ中
國を告性名を名のりて嗣子を引辺に従へ関をさんとする様に
関の玄士等宏見と咲より剣符を合せ男女の骨相を問者
こ為を遮り流口に喧しく扱こそ波是辰よりの死符を思ふさま
しき仍者不審あれば速に二刀遮して再命を待へきなりと二十
人余り破丸々々走来て八方よりおつとり固めば嗣子は驚き神
怒るまでも稜本は些も終く氣良なく蝶を後ろに擁ひ沈
ところ仍ざる人々の中家かな我輩兄弟におはしいくる誰あの丞
侍の者にて波是辰と申さんにはいさらも不孫なし事なるなる

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148
ガラス使用

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148

ガラス使用

人違ひ卒爾の事にて後悔なすなと陳けれども此広昌不承にて
当藩の縄取なれば奔らせて主君の命令なれば是非なく今
重太郎が隷をも耳にかけず大勢一度に打掛り捕んと
一旦手をゆるめ三方より取巻て後除(?)引廻し是非なく
身がまへするはいかにと此所に至る奴原手向ひ苦しからず
先宸しやち知を除(?)ける後に陣(?)ひの士卒等押(?)かゝると見るより
見るを捕とせしもいかにて引捕へ一人残り付(?)く大勢に流れ
能々の刀を抜て勇ましく見する人もおもとに恐れ思ひの
兵卒なるもの二十人余りも引入り八十人余も余りに
麓ひるまへ後のもの打ちかゝり大勢に殺さんとす
敵刹を召し八方に付けかし手の付け合の組み

暇なく瞬する間に見るを早くも悟りし先出切たのごとく人を斬る
捕手の滑りかゝる手を挙ける所を払ひのけつゝ走り行くを
一人の武士退かけ来り後刀丸延後稲木九の肩を一寸と掠るを身
ひるがへして地を打せ竹木仕込し一刀ぬく抜波武士を寸と切女の命
一生懸命只一刀に切なせしは是を見るより係るの士卒し
つぎ副子四をおゝれ走るは後重太郎を会て隠き支へて居る
しが嫌の危急を見るよりも救ひ出さんと素迅の身刀を脱かし働ば
周る好儀士卒を届し玄田兼太郎のものも一人の従浪人を
斬るを後して捕つぬ身のいかなる事を負せても据へし此金銀包を見
人金ともに刀抜放し岩見左眼ならず斬て後重太郎は後手も冷くなく
抜合せ両三度打合ひしか間でる太刀を引きましく頭より胸いさまで

剛射ゝ是て好傷ハ然に際て仲是死を毛左ゝ好利ハ今眼お
に我子をうゝ是憐り猶にうち嚴しく下知を加る程に岩見人孫
勇をふるひ合剛刀士の荒ゝることくおに那是後にかゝ是當ると
幸ひ斬巡る說き修辣の太刀風に斬ちらさ是し木葉武者即
時に命を損き者十有餘人劍を蒙り半死半生敗を志ゝ後仙石
好利大に驚き此件にてハ叶ハじとあいつの太鼓をうち鳴せバ猖獗
に出せし百ゝ武者遠詰重て到しゝることなれバ生長を繰りて
百四十余人を得へ墓地に延来りつゝ此件とみるより大に驚
き發兵尋常にてハ捕へ難しと五十余人に嗣子にむかはせ
ゆくに生捕て岩見なおに引立行遂治刀を拔たなし嗣子
猶にさしつけて程季にうち向ひ汝猶て歎對せバ此女を

利教さん尋常に行を受なハ助命をも君に飛成ゆさせん今
生死二ツの返答せよと言ゝうに此ハ是ハさしも鬼をも欺き勇士
も眼おに妹の人質謀計とハ知りながら猶に納て両腰を投
出しつゝ自若として已是と行索に就しかバ許多の士卒に兄妹
を引立させて仙石百ゝハお後をちりて城内に入て是を云上
なるに好利我子を討ち深く岩見を憐り手段に稱ゝと謂と
役けて程季が狼藉のことの中を無さ故に云入りるまで嫁
家逐一使し問ひ是んに深く程季が武勇強氣を感ぬり
て仙石等が云上を疑ひ如かるゆ多く挑撥政策を言て此
旨を傳ぜゝ是事実を探らんその為に當家の勇臣楯長者
成実とりて彼是なく火急に使者を発程らせ岩見兄妹

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148
ガラス使用

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148

ガラス使用

二人りの者ハ紛を解せゝ是川添の役所なる閑室に鏡垂せ
いと嚴重にぞ護らせける

第拾六回

抑岩見兄妹が俄に裡絨まねかれて閑室に入士さる者の
扱ひにあへるとその縁由をつぶらにまゐるに夜に下毛玉板
橋の俠客若松太平なる者ハ岩見兄妹が詐を追て一臂の力を添
なんと先鋒後路へ志し已に発足せんぞる打出頃奥より海上
者が途中にて玉緒が一個の武士に伴ハれて行しに遭しと
語りハれば其に僧隊衛乃にかゝり日なら頃白石に来り
とある茶店に休らひてふと兄妹の禍を笑と等しく思に
いそ知て楯家の城下に思しかば多羽屋佐介といへる宿舎

ハ元来の知音なれば夜に宿りて兄妹をまとひ出さんるを
思ひ主人佐介に云くと由を語りて高議するに佐介ハ太平を
兄弟分にて義に傾ける本性なれば若松が義気を感じ
狂岩見兄妹が上をあハれと卑くも救ひ出さんとて俱に心を
くらしめけるが佐介ハ元来國主の長臣楯政家が邸へ出入ハ
先此方へ那ひ見だやと若松をして岩見同胞が来歴乃び宮殿
の宮を出さる事まで委細記させ且主太帝にハ若松いまだ
面會をせざるが故に幸格好を書さるとも玉緒が年齢
容姿ハ詳かに記させ佐介是を懐にして密に政家が邸に
いたり家士田辺策平に附て若松が書付をもつて那ひ出
ければ政家奥に坐上て後若松太平をも召寄田邊を

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148
ガラス使用

志て猶勇を落せず翌朝に至り再び雪羽屋作介をめし
奇形ひの筋を笑瀬する由を告たる平を作介に頼らまぬ
たる平此首尾を笑ものから踊躍りて歓び作介に労を謝し
て後井の辺に至りて新刃を浴者産家なる大巳光命に祈
誓をかけ岩見兄妹が禍をまねかる志めんとねがひける又
政家の方に於ては此形を笑届しよりんに定ることも有けん其に
主君に笑へ上同列の士に高議て岩見同胞を仙石百々が方
より引丸川添の役所へは入けるなり夜に弊肘に氣弓秀は
城下の旅舘に在て奸計をめぐらし百々仙石が子を借て
岩見を苦しめ亜んと計奴猶も猶格を送りつゝその便宜を
窺ふ所に仙石方より密使を以て志のびゆゑに告誡けるに

あに出所より作誡をしかば彼因人者しく拷問にかけんと
欲せし所手段よりの沙汰として一昨日夜人とも閑室へ引遷け
上の事情たり難けまでは此宿中通ひとて彼思ひ無使を走
らる事ともいちゝくに告誡けまでは弥氣未だに驚けども
さまがは奸智の曲者なまでは熱志を謝して後者をかへし諸士
等を奥の一方に招き仙石よりの内意を告今密計已に露顕
に及んとせまでは此地を去て二本松にて落合中べ死
の方各密に手准彼あるべしとて猶耳をねぶつて密計を
さらに紀定めるさと大平家への奴僕にはるをあらさばその
夜密舘のうちに命じて奥方に於て酒宴を設け夜僕には
次の方にて終夜飲あらはべしとて別に酒肴を抜け並弊肘

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148
ガラス使用

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148

ガラス使用

をはじめ徒士共ハいづれも砕しと下女をして楼上に切腹を
遂させつゝ深む事に忍びらちに卧ける所て大平宗左の主人の
僕ハ倭人に寄つゝる所を縁者ゝ後ロより忠実せし事ての
酒宴の時をうかゞひて段々ハし下女を合せにさらひぐ内の客婚
徒士等ハ月の入を合図として忍び寄て塀を越せ而面に下
各々を先に逃させる秀ハ所に止り皆々を二尺下りやりし
兼て地理をも知りけん如法闇夜の軒づたひ城下をさる事
小道よりいづこともなく逃去ける千熊又仙蔵ハ津軽流の波岩
家へ使者に走る楢崎君成実ハ目ろしく津軽流の城下に突
来役筋より申達し鎮めに至り波岩左衛門死君に謂し
人羅家の直書を写し右衛門が入込しる事を済りて帰

那須がし或は込くハ手に段滞留逗留の窮に困ひ居る一番にて
遂ぐりけるハ那須が方にハ彼を殺害して剛く家内より鉄炮を
於立て申るもの見えて家中に残て彼が悪の事の更に
ろし左衛門が継来たりつゝ若侍迫く召仕ひし我が席に与
さりし故積年恨を晴らせし身の稽古その名を継て跡家を
作る奸悪佞者なく悪む者りの事とて残る家来主
思し居たる苦路をいかにも家老某て弥然足し楢崎の苦労
疾かにさけるが如く此度右曲者ハ斯く言に摘て残らず刑法にかゝらせ
らるべしと厚く成実を労ひ饗応して褒美として成実に
渡されける其後波岩の跡を立りし発足ハ家を見に
継て席を示し右の縁く皆々おのれ一心に嫁が縁組と

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148
ガラス使用

あとを形あらんと思ひつゝ時刻をうつさゞ彼鬼等を召捕
嚴しく拷問せよと節を拍て命ぜらるゝけるゝ故家畏て捉縛
する後路負の弟婿同をゐて近邊人を命し程ゝ後へ繰へ出
方の出口をすらせ一個もあしきゞ[illegible]ぞ繰へける時已に亥刻を
ゐさりけるゝ捉縛後路負五郎ゐまの花縛へ志のびまゝに[illegible]
[illegible]へひと押書一同に込入ゐるゝ大平宗六二人の僕は時迄も[illegible]
[illegible]我を忘れてさゞめ居けるゝ是をみて大に驚き逃んと
[illegible]を離倒さるゝ苦もなく繩をうけらるゝけるゝ所の縁[illegible]人
が案内に二階を同がけ加けより故縁の四角を切て蔵せと中に
人の[illegible]ゐるゝ[illegible]逃失しと見えたりとて大平宗六ゐその
[illegible]を責問ゐるゝ[illegible]人ゐ有よりの次第をのべ[illegible]二階に[illegible]て

後へ志ゐまゝ[illegible]ども[illegible]二本[illegible]是非ともかりやべ[illegible]
てか合ゐるゝ途中の[illegible]まで悪く白状に及びゐるゝ負五郎
[illegible]大平宗六を嚴しくいましめ[illegible]人とし
長町より[illegible]をきして途をくてそ逃たりける

第拾七回

御役[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ひたる十人の好[illegible]二本[illegible]さして
[illegible]名[illegible]川の[illegible]後[illegible]を[illegible]
[illegible]人の[illegible]士の[illegible]中に[illegible]一個の
[illegible]白眼[illegible]逃んと
[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]
[illegible]ゐ[illegible]

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148
ガラス使用

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148

ガラス使用

のがさねじと發つ色で打てかゝると左右の役卒早捕も渡まへ
流し付入早業の絲の千すじに忽地刀を打落し要手と繩をかけ
倒し早くも所人を生捕が残る二人ハうかゝふと逃足出して逃
のきつゝ走り去りけるが途中で次路捧間の一人の人
致すなと引金さがりくいに讒ひしが更よ彼知ずして流
ら生捕の縄目を掛けもの捕らる主人の跡を慕ふた
を憂しく責て斬首する孫三郎が引出し拷問ハ
とのへども其夜猿臉を逃出して落二本松まで落合ぐれ
約定なりしが孫より果ると思ひしのとまでいぶかりしなり
さる都き途一ト白状しけるハ先人佃義を以て鞠を四ヒ披索
るにし褒賞なりしで政兼と是より激実者数十人の妻登及

ひ二人りの僕を引きさせ白洲に於て裁しゝ質問ありしとき
わげて難らかけるバ若頭に繊々子務る所に阻せし要事の
意統を白状しけるバ勇に由をききわげて岩見ハ妹を匿
家よりまさせる羽田庄方へ引渡しぬ後で岩見ハ積年にいた
平佐ハ不對面しその厚志を謝で感謝をうてし大方ならずも
嗣ハかへて平をとうちつ入せりてはなるものハ激なり積年の別ぶれ平
不對ひはいまだ苗が介抱をうけしより嗣子が數まる一と
共も此度の樣子で平る恩義を謝しけるハ右の平のさるべく押
止めるに於ん其の余りの志邸で斯是入佃案閣氏れの直紀を志ると
うけぐひいひ乃ちし歴との令孃を役中も花街に於に交しすと去
早速なくも面目なるにわるる慇懃なる言に感葉を此ハいを

最苦しくぞ山なりとて嗣子が業遣を見て三浦恵人業を託
し其身旦國修行と号同胞が行を追立ける途中其出稿を
安しより路を急ぎて高所に来りて作介と商議てゆゆの
由を楕政系に内務せしるを語りければ同胞もうち安心に
嘆せしがこゝに初めて心安堵卿憂苦を忘れけり故も
楕家の役所に於ては若松太平が御の上に百捕へたる意
其の自快に後て忠人種家が無寛も詳に解又仙石好利
をはじめ其一家の組下鷲胜が嫡路をうけて私に闘諍を醸世
るを明白にかゝりしかば急ぎ忠人同胞を容令に遷さられ
其後其常其の裁許に及ぶに此人赤見軍六ハ寄鷹と同罪
たるべきとて首を刎て兼本にかけられその金ハ寛仁の

汝法として罪の軽重によりて苦をさづけて追拂ひ出ける事に
嗣子六兄と其に急羽田屋に移りてより此頃の憂苦発せし
にや縁に如此煩ハしとて打ひけるにぞ種家太平作介も
倶に発ひ用章て介抱し医師を呼び薬を乞起居の看病
猶豫なりしまさまども病症日頃に立り良剤寄方の効
も見しく八月の初めの六日遂に大なるなく滅ければ種家が
歎き大なるなりしが折て宥べきにあらねば作介よりして嗣子
死去の事を役所にとゞけたりければ早速城主の内命宥て
田辺筆平入来り宇太郎に悼を強て作介に命して悟を
請ド叮嚀に事をもうしハせ松林居といへるち内に葬て
黄濃一堆のうとゞなしたりける後改て楕政系岩見を

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148
ガラス使用

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148

ガラス使用

招き對面し[illegible]して兇徒に取り[illegible]同胞を[illegible]
[illegible]仙人[illegible]なりとて[illegible]に副る[illegible]の悼を[illegible]大[illegible]を[illegible]
を尚ひ[illegible]も[illegible]業[illegible]明日[illegible]早く[illegible]
些[illegible]なるとも[illegible]より[illegible]として[illegible]
友を[illegible]に[illegible]岩見[illegible]
[illegible]
羅を[illegible]
[illegible]
の[illegible]明に[illegible]

第拾八回

干[illegible]又仙石長[illegible]好利[illegible]

同胞を苦めたること[illegible]直に切[illegible]を[illegible]
しかばその[illegible]に[illegible]といへる[illegible]
[illegible]の[illegible]者を[illegible]ひて[illegible]川の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148
ガラス使用

藤ニテ逃おくさまぞ肩腰をくぢきてへてだる悪業等を
捴緒をもいて四五人一所にからげて制統もろともに遠所の荘
官許引出して由を告捕家への遺書を認め兇徒に渡して城を
に詠へ戴許を更て急も角も宜に引ひぬるべし我共は直に
去べきなりと述べて荘官村役等は岩見が上を能知まばこの
大勇を驚嘆し一義もなく更免けるにぞ種季太平は
愛を去て奴本に頭を明し行くて三日路を經平沼といふ
所に居たり此所にてより下元國宮郡の気に分る路のあり
けまば此駅なる薬店に納ひ愛にて太平と袖を分ち再會
を期せんとまるに若松は粉河処までも送ひ行んとあらそしふ
を重太郎理を尽し是を諭し嗣子が孫の事二浦屋への僕の

儀を託し路用を分ちて足早に上思の駅をさしてぞ急ぎ行
ける若松は忘れとして和田に立重太郎が出げ見えぬまで
見送りたりしが母がて薬店を立出て浦屋を横切極胜の
方へぞたどり行ける其後若松は宮郡気にかくり二つ屋
うちに至り有し次第を抱語り玉鎖が僕として重太郎より分ち
たる令子を出しけまば四郎左衛門夫婦は更なり太平が妻も
皆毎に驚き且感じ玉鎖がうへをいたく暫は涙にくれけるが
四郎左衛門太平が出したる僕をうけざりけるを若松言葉を
尽し説きあけまば四郎左衛門依して此令子を收め僕を請ド
て玉鎖が佛事を営ミ粉文岩見重太郎が追悼の法令を行ひ
永代誦經の料を布施しながく孝子のあとをとむらひける

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148
ガラス使用

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148

ガラス使用

若松も殊まる令にて嗣子が佛子をいとなゝ殊まるは是も
永代誦經の料として松林庵へぞ納めけることを見彼人三浦
庵が弟勝なると若松が廉直なるを感賞しければ同席右ろが
家は並富榮へ太平が義使の名も孫ゝくその時の英譜とぞ成
ける却説も岩見重太郎秩季は若松太平に別れてより考陸を
さして急だけるが吏よりして武藤に出繼大川等が行衆を捜し
求めけれどもさらに身がくりもわらざりければ夜ともうち立て
九月の下旬信濃を經て越中に出立山の奥にて巴地を討て山
田土民の害を除き富山の城街に逗留して雲のまがりを求る
事十日余り夜にて是を止むるうち黒河の里の人士の愛女音
瀬といへるに妖怪の見入たるを請めわたく富山の藩士角新

秋夜が二男虎之助度直生年十四才なるを門人とし怪異を切の
法を傳へ此妖怪を退治せさせぬ後年に至り此小年秩季が身
に属し愛々くの合戦に武功をあらはし玲木田の又人虎と呼ばれて
誉を天下にあげたりける所て岩見秩季は富山を出て加賀に
至りやがて夜をも立出て是より肥村新十郎と変名(ゆきく)行くて
越前國に入ってうしこと仇を窺ひ二度さ三度さ城下に宿り若
狭より小近江を經て郡に入り三條大橋の辺りなる旅舎に
宿りをもとめて十一月の上旬より十二月の中澣に及ぶまで日
毎に客店を立出て洛中郡を送りなく覘ひ求行しが一日洛西
小山の石とりをめぐりて三條の歌店へ陽る乃子本通の松原を
ゆくると見向おの方より身材高く骨逞し見大法師頭首に

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148
ガラス使用

網代笠を載き身に編き方袍を繕ひさも苛めし和尚を
常一箇の侯鉾を左にさらげ右手に一把の侯禪杖を衝鳴し
悉く酒にや醉たりけん歩む形相漂に如く思ふぬ舌を
飄して一聯の詩句を吟じ遠方をさしてぞ来りける是は
此頃洛西なる妙心禪ち大龍和尚の命下の行者に侯牛にて大
力毅の者なるが原に一個の英士たりしも其君に行ふ者にして
身退れ終に道心者と成て大龍和尚の命下に属し洛中
和尚を思ふに傍衣をまとひながら彩太刀を佩鉾を開くに法人
憐れ見ずして果議多く布施しける遮莫程雲呂を知ら
給ば傍形にして太刀を常たるは宛も慢しき曲者なり宣めて
勇猛の業ら偏に我父兄の仇敵廣漸流漸の案の世を思ふ

姿なるらいでや其形容を識てんと徐に進て笠の内をさしのぞ
けども見へ分ねば要をもとめ近き行遠さ及那大法師の太刀の鍋
を無手と合て挨戻せば其三歩こちらが腰を捲りて踏
止り毫だ動かぎ度振あり何奴なれば侯牛が乃を嫌げ無礼と
なれや量るに汝は盗賊なるんさあらば計せさせて呉ん智識の引導
くらへよと侯禪杖を丸直せば程雲そのまを丸とぶ給いに汝が僧の
身として殺を嗜める異形の出立いぶしくも宛慢しそも我を誰とか
思ふ聞く天下を縦横せる肘村新十郎程雲と唱まつる万夫不当の
猛者なるぞいでやく逆を見せんぞと乃辺に生じ一丈有餘の棍を若
もなく根とぞとなしいと軽くと合せ直し悪僧某を魔けば侯牛怒
て笠なるべり侯鉾だに後へ投げり件の禪杖うちふりて微塵にな

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148
ガラス使用

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148

ガラス使用

まと疑ひをひらかと解し花遠へて種季が好き性慣を後年たち
しを拂ひのけ人交もせぬ數刻の國戦いづまも治ぐる御なるに力
も一双劣らぬ優らぬ精練至妙奮激実戦同光しかりける次第なり

第拾九回

初て両雄怯ぎ距ぎ小夜更るまで國へども勝負の気も分ちてば
互に心に驚ち感じ後年に詞をかけ中を是壮士皆し待ん
憎き海が武勇伸く山城のゝ並なるぞ必ず故わる身のよなれ
実を以て我に告よ且我上を説ぬさんと侍の様に擾おかけ祿枝
をさし並て原負乃ハ老乃の浪人なるが後わる説候につゝく
まつり切を果てゝ貴の乗地を編て一方の隊打ちしに一大戦場
にて接がけせし程に依て君なを老ざけらまて閑居しが貴乃

天性暴慢放逸の氣随ものなまゝ臧祿を辞しうまゝを退去さらに
ものわらざまゝ俗に仏門に投て妙んちの大就祿師の法身となり
今ハ後年と呼るまでも心ハ忘まの勇士の本意能君を以て再び
仕へ武名を宇宙に耀さんと思ふなる我人魂を師も憐ミてや哲
めなんぞ故に刀劍を縮衣の表に横さへぬる宵髪の乃人俗性ハ
國家右ろ永和と語るを以て種季ハ驚ち感じ且喜び猿を
をめ物にもを付慇懃に礼をなし扨ハ英名耳に裏く閑性
にてはよみ素肥村新十郎と名告ハ俗の様にて実ハ流お名誇
の産出ん平右郎包並今改めて種季と呼なしぬ去る歳下毛
なる板橋にて我兄平壽と妹が窮厄を救ひ取りし深情厚恩
は舌を以て謝し言ましべくもはいざとも又も報首謝するまでれ報も

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148
ガラス使用

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148

ガラス使用

植松勇男と
奪つて
兇徒を
斬る

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148

ガラス使用

壯年等市人のいさかうるるぶれを[illegible]
酒利不要じる付ふせんとしてりしかば凡そ[illegible]
宵るに此投ひを懷り光綱を追先辻面く援つを繋てうまば光綱
もべなく五個を合るをふたりをも援で忽地にうけつんでいん人[illegible]
立返報にこしして蒙うち拔ひ儀宿に戻り客全のさ人に對ひけふの
次身を拘留きべ亭さは大ひに驚き怖てそれ一大るに出ぬり抑高地
の[illegible]美浦充孫も待氏綱は暴戾暗愚の利ふして侵[illegible]
吏を除く要し氏をしてこげ年貢につのり報義の設[illegible]多ければ
うしむ老ふうに侵ぬるに此頃氏老修行と唱て高地にさしこ来
し赤塚を招時廣程屋笠掛城天山双口席等をといつる主人の
源浪人諸般の武藝に熟練し極勇猛をもて驍氣人を凌く

といつる勢も焉洋の癖者を大海をもて抱え一家中の壯士たちの師
範となりぬひね今日迄客のこと也あひし彼めんくこそ頂ての武士て
赤塚程屋天山等が門人にてをゆめ彼人こそ出雲なくまぐ
おこまとをり無志の意趣を師に告て暫らくまで多勢を借し城の
檜威を笠に恐て代官の儀容と見るうちに城中の客全を滅ぼ
捜さん度此恐をしるのみ安全の計策にゆゑやと告るを彼て光
綱早くも打うなづき我彼人こそと云ようのうしみもなれにるを好
いでうを無謀の死戰を挑んと人の厚意にまかせつ今より此地を
立退んとをしくに仕度調へ諸全をを立出て海中をば渡りし
こうに美宵過く夜にけり打しもの[illegible]
霧まに成ける十宵余人の曲者各面を覆ふて援つを

一同に揃ても云ども八方より取囲て撃んと競ふが光綱毫も騒ず
其身の丈三尺二寸の光ある利刀抜放しつゝ前後左右を払ひ
奔騰勇力誠に忽ちにして死所で廊下に四五人を仆せしが残る輩
是に恐れて逃亡ぬ光綱是を追ずして其死骸を検して若干が
うちに居る一個の士の顔を見て聞てある顔末記をかぞへて苦痛に堪
ず自然しけるは我等は当城主の師範たる赤塚形尾天山の三士か流
浪の時より従ふ家臣にて其を頼て来る所我師の二士は既に是迄て屍
の僕家に往へし人なるが死する事を覚て国政を殺害し国を去て
当所にて往で後士の師範なり然るに因及び其外武勇の士も
壮士あり当時は武者修行に出て在ざりしとや然ば遂に一個が身
に突掛るを防んと当家に往て其手下と一家中の壮士を頼るも

其に後播と定きる由に附けども若くは壮士等も得なくて既に逃去りて
怨を報んと近く二士に若加勢を乞ふ其二士と誰々同志の者云
を結び旅宿しての身を窺ひ終に果さず又二士も共に武術に熟し
強くや逃去ぬと語るを聞て光綱は顔に色ちらく生命を補たるを
ゆるして夜と日に継て旅にて来りしと密に語るをつらく聞彼二士
等は我の方の者成瀬広瀬大川等なるべしと心に思へば其辺に含
しく是を苦んと思ひつゞけしが然しも今宵再び過ぬと雖
とても是も未練ぬうち権事欲殺殺せしとて天にも寄る人非人
ゆえ我軌の鉄鉢に報ゆる所為と四方にも度取て其途を尋く
終りなく旅も明ぬ是は猿猴と俱に網繫を頼みて別色能教導
の後再会せんと思を謝して笑んとせるに猿猴鉢を被り棲り我も

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148

ガラス使用

禪師に暇を見て一臂の力を副べしと勇むを種季固く辭し英目を
約りて別れにけり

第二拾回

郡の肘村新十郎田名岩見重太郎の妙名を出て三條大橋の護
金に陽り倉率に房幾を繋ひ猿の洞度をあり者ならず自家を
出立し宮城にいそぎて丹後國宮津の城下に充付つ護金に入て休
息し直に一刻の書を認め諸国の役所に立ちつ本国姓氏を詳に
名乗乗意を述べ那出を出せば役人那出を受取て種季を護者に
退りし後諸士を命ぜて種季が見出せし那出を披くに出家の藩
士亦塔野尾天山の三人の者は名將の渡人四名侯隊軍太郎成瀬
大学大川八左衛門といへる者にて父兄の恥なるをもて付欲しの事入し

猿るに出家に召抱られ仕官の出世なるを以て速に来と傍員御
付しまゐるべし免許状及び人相書をも持来なせば被見宥て
猿るべしとの文云なるを以て諸士大ひに驚きて城主の所なるに出仕なし右
の次第を云上なるを以て種氏も驚きなひて早そく亦塔野尾天山の二士
を召出さんと岩見が御状の訴をもて問せなふに二人の士は包に
なく我所のいきじ余義なくも名將に於て岩見を討て後下毛板
橋にて嫡男手爲を返り討にせしいふ事を云上ければ城主種氏
二人の士を日頃露過ありける程に岩見を深く憎ども種季先状を
もてりと雪がすべき事なく岩見が随意仇討の義をゆるさまにけり
されども種氏二士を思ひて其太刀筋を授ける者に助太刀
せよと一家中へ命ぜらるに忠ある老臣は老ぞく是を諫

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148
ガラス使用

ども耳にさうして遠ざけらるゝ扨も紀討の日限は此月初めの五日と
定めて其地に向ひ鴻と定りて城を立より赤塚[illegible]大山の三士及び
種季つも中後さに至る所に至り日暮しを待ちにたらしき越中
富山にて師守の縁を結びつる角部虎之助良直一個の勇士を
伴ひて種季が旅宿に来り一別の情を述て扨いつるに素君に別
まで後兄の妃に國を去善く統国を經世りしが此頃一個の豪傑
に出会し連立て此辺をよぎる折から岩見ぬしの紀討ありと街
巷の風説なれば其まで吹あるに扨に君には尚国にて紀に
出り会ひ時て勝負を遂なふかと悦び勇をして出旅宿を尋て
いそぎ走来りぬ此大人とそ下総の侍人植松荘兵衛光朝ぬしにて
なりと引会ましまに岩見初對面の口溪終り國永和より兼て吹

えし光朝ぬしにて有けるよとてびの宿志を遂るに至るも初は半夜
の尋ありとて却妙心程なにて族牛が強まる由を志らぐ告るに
光朝もふ思議の奇遇を感じつゝ至る所と鄉を誠にその及び
ざるに依して師守の縁を結びつゝ紀討の後見を良直に至
けまゝ種季厚情を深く感じ難きるにまゝなくあるしけり折て
紀討の当日となりしかば岩見至る所種季は門人角部虎之助良直
植松荘兵衛光朝を左右に従へ恭統と場所に来りて酒食を喫し
時刻今やと待居けるに程なく赤塚主稽時廣粮屋陸相粮成天
山双四郎なる遠等助を刀の門人等五十余人をお後左右に従ひ連て
入来り合場に双方を場に立出武法も御[illegible]を拝る所を受けけ
弦くしや廣瀬軍右衛門打世成瀬大学盛純大川八左衛門恩忠去ぬる

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148
ガラス使用

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148

ガラス使用

年父十九歳をだまし討にせしのことなるぞ以年齢を返り討にあらしてそ
極悪無限の曲者等今日浪等三人の首領を討て其家へ向かり
兄弟して刃を受ようとた刀を向に打なぎし進んでいまは三人の者
同じ無量と三方より押包囲で討んとするを伝説なりと稚季中
我等の如く三方に離れ勢ひいと烈しく暫時に三人に切立てを
欠めたるは悪浦右の助た刀の壮士だ千人余りむらくと八方より
近付て切拘くをふりかさしおめいていまは稚季は三人又人を一刀に
切伏難立仇敵の傍へ身をおどらして走出るを踏る助力のめんくは
に歩かれて八叶ハじと思ひ取り出し一個の出刀をめらげ打てかゝるを
稚季はるのとも世に遠さなから草を刈ごとく薙るを幸ひ切て出るに
此時までも遥にひかえて年左衛門傷を見捨しくて拙れ角那敵の

同胞を苦めたることを露顕せしより直に切殺を命ぜられ
しかはその全身に割然といへる悪僧有て深く出刀を憐り
口の仇敵と近々の深き者を得たひて阿武渡川の辺りに待
うけ計略をもて討ちたんと行向をきくぎり居たる所に年左衛
稚季は若松左平とうち連て変をるこんと知るく来る左右の
並木の陰より那是出たる悪僧割然悪者数十騎者さがくて
素顔を述つて討てかゝるは年たち大に怒り解る中へ大きを廣げ
我等のごとく走入て麻の如くなげ散し滅居端のけ割然が
逃退所を右手をさしのべ首筋軀で引寄るがら同より言く
さしよて大地へ倒となげ付きは左平走より割然の挽揺曲て
いましめたり稚季殘る奴原を四辺の侍示の抗引ぬきたるき体

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148
ガラス使用

蕭ニテ逃おふさまぞ肩腰をくぢきてへてぞる悪業等を
撰緒をもんて但し人一所にからげて刺殺もろともに遺所の荘
宮評引出して由を告捕家への遺書を認め兇徒に添て城を
に誘へ裁評を更て兎も角も宜に計ひぬるべし我は直に
去べきなりと述べて荘宮村政等は岩見が上を能知るべきその
大勇を驚嘆し一義もなく更気けるにぞ種季は平々
変を去て坂本に旅を明し行くて三日路を経平沼といふ
所に居たり此ほとりより下毛國宮郡気に分る路のあり
けるは此駅なる薬店に休ひ変にて本平と袖を分ち再会
を動せんとするに若松は粕河外までも従ひ行んとあらそふ
を主本師理を尽し是を諭し嗣子が諭の事二浦屋への僕の

謝し其身は本ごく名誘に浸り紙うちの次第返一気上しけるは
完戸候種季が孝義武勇たゞひなれを佐藤のあるり此人知に
倍し来地をなひ尚家一の勇臣と称させぬひいとおん覚く
めてたりさまは岩見種季は本国へ陸奥の国なく宮郡気の
三浦屋と陸奥の旅舎鳥羽屋佐介へ頼くの送り物をもたら
せて四恩に報ひしよ松林房へ香華料且又布級物おほく
送り兄と妹の仏事に充せ若松夫婦を喋むうえて家家の長
育とし仕ひ樋松角郎が来るを待て主君に吹挙せんとせしか
ども土地はざまは家に止めて餐恵行に女士は又も思ひせん
とて我者修行にぞ発立ひり往年完戸家没落して岩見
再び法国をめぐるに法家その勇悍武術を称して大孫をもて

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148
ガラス使用

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148

ガラス使用

208
2
148

召抱んと謀くに招けども稼季思ふ由や有けん徳渓の招きに
変せざりしが終に足利家に恵系して終に田を水稼季と名
号徳渓の数に入しかば国永和を吹挙し且植松角部を羽
翼の臣とし戦功に依て昇進しけるが足利家滅亡せし
より大軍を引うけ強敵の国々を解比類なき働起して植
松角部等徳ともに従僅十八騎に討なされしかば見
るゝと敵万の中に割て入思ふ儀に敵を討て死くしく討死
し名を蒙天に聚らせるハ同ざるしかりしるなり

岩見重太郎一代記後編　結局

江戸人形町
品川屋久助板

東都
書屋

芝神明前　和泉屋市兵衛
芳町親仁橋角　山本平吉
大傳馬町二丁目　丁子屋平兵衛
通油町　藤岡屋慶治郎
馬喰町二丁目　森屋治兵衛
同所　山口屋藤兵衛
南傳馬町壹丁目　蔦屋吉蔵
人形町通庄助屋鋪　品川屋久助

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148
ガラス使用

208
2
148

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148

ガラス使用

国立国会図書館　岩見重太郎実記 2編 208-148

ガラス使用